

RAKUGO
THE
FUTUREJAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 26 回:新・悪魔事典

このラクゴ・ザ・フューチャーがひそかにライバル視していた、牧野修氏の「月刊ブロス」の連載エッセイ「悪魔事典」が、たいへん残念なことに終わってしまった。とにかく、くだらなさ、ばかばかしさ、意味のなさではラクゴ・ザ・フューチャーと双璧であっただけに、その終了が惜しまれる。しかし、生あるものは必ず滅ぶ。生者必滅会者定離。なまんだぶなまんだぶ。というわけで、ガイナックスとも落語ともSFとも何の関係もないのだが、今回は「新・悪魔事典」と題して、牧野修氏の悪魔事典を弔うことにする。え？ それはぱくりじゃないかって？ うーん……牧野さんご本人には口頭で許可をいただいた（快諾したかどうかはさだかではないが、はあはあとうなずいておられた）ので、ま、いいんじゃないっすか？とかいいつつ、もうはじめてしまうのであった。

ぴんぽーん、ぴんぽーん。
「なんや、仮眠室で寝てるのに誰や、今頃」「すみませんー、どなたかいらっしゃいますかー」
「何や、何の用や」
「わたくし、事典のセールスマンですが」「事典？　なんで事典のセールスマンが仮眠室に来るねん。そんなもんいらん。学研のやらブリタニカのやら平凡社のやら、うちの嫁はんがセールスマンにだまされやすい性格でな、しょっちゅう買わされよんねん。もう、事典はこりてんのや。わしが会社から帰ってくるたびにな、『あんたー、事典買うてん』ゆうて太陽系をめぐる惑星みたいなこと言うて玄関に立っとるんや。ぞっとするで」
「太陽系をめぐる惑星……あ、自転・公転ゆう洒落ですか。やっとわかりました」
「そんなわけで、いらんさかい」
「そこを何とか。安うしときますから」

「いらんちゅうたらいらんねん。帰り」「事典は事典でも、ただの事典とちがいます。あくま事典です」
「あくま事典？　何やそれ」
「地獄のあくまは、六千六百の部隊を擁する七つの軍団から構成されておりまして、魔術師や使い魔などを合計すると、その数七千四百万五千九百二十名といわれております。それを、一名のあくまにつき一卷をさき、詳しく詳述した決定版です。全七千四百万五千九百二十巻。いかがでしょう」
「いらん。置くとこない」
「スペースをとらない省エネ製本でございます」
「なんぼするねん」
「お値段のほうか、一卷につき一円ちょうだいしておりますて、しめて七千四百万五千九百二十円です。お買い得と存じますが」
「あほか。高すぎるわ。はよ帰り」
「あ、あ、あの……それでしたらお引き

いたしますです。どーんとおまけ申し上げて、全部で五百八十円ではいかがでしょう」
「めちゃめちゃ引きよったな。そらたしかに安いわ。けどな、うち、あくま事典なんかいらんねん。なんぼ安うても、いらんもんはいらんからな」
「ま、ま、ま、ま、そうおっしゃらずに。とっておきのサービスがついております」
「サービス？　今買うたら第一回配本だけ安いとか、地球儀がついてくるとか、洗剤一式ついてくるとか」
「え？　潜在意識？」
「耳悪いんかい。洗剤一式ちゅうとるやろ。そんなしょうもないサービスはいらんのや。もう〇〇新聞でこりとんねん」
「そんなつまらないサービスとちがいます。ただいまキャンペーン期間中でございますて、その間にあくま事典をお買いあげのお客様には、

RAKUGO
THE
FUTUREJAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 26 回:新・悪魔事典

もれなく三つの願いをきいてさしあげる、とこういうことになっております」「三つの願い……？ おまえ……よう見たら、頭に角はあるし、尻に先が矢印になった尻尾はあるし、全身黒づくめ……もしかしたらあくまとちゃうか」「もしかせんでも、あくまです。今まで氣いついてはりませんでしたんか。このかっこ見てわかりまへんか」「すまんすまん。それにしても、レトロという時代錯誤なスタイルやなあ。今、西暦二千年やで。もうちょっと、モダンな洒落たかっこうはでけへんのか」「あくまというのは古くさいもんです」「そらまあそうやけど……」

「我々あくまは、地獄の黒い穴の中に住んでいるんです。そういう生活がレトロな雰囲気を含み出させているんですな。これがほんとの穴黒参む……」

「しかし、あくまがあくま事典売りに歩いてるとは、あくま業界も不景気と

みえるな」

「そうですね。こないだまで、地獄証券に勤めてましてんけどリストラされて。で、どないでしょう、三つの願いのほうは」

「うーん……ちょっと心が動くけどなあ……でも、昔からあくまと契約したら、いろいろだまされたあげくに、魂を持って行かれてしまう、ゆうかな。やめとくわ」

「そ、そんなこと、決してございませんので」

「嘘つけ。わしはよう知っとるんや。何とかいう作家のショートショートで読んだんや」

「星新一でしょう。その手の作品をたくさん書いてはりますからなあ」

「あくまが天神橋筋六丁目に住んでるゆうタイトルの短編集もあったな。あくまがいる天六とかいう……」

「そのネタ、前にも聞いたことありますよ。ラクゴ・ザ・フューチャーの連

載第何回でしたかねえ……」

「こらこら、声が高い。使い回しは世の常や」

「でも、あれは全部嘘です。あくまゆうのは誠実なもんですよ」

「そうかあ……不誠実やさかいにあくまとちゃあうんか」

「それは、世の文芸作品とか映画がつくりあげた、まちがったあくま像です。さあ、ためしに契約を……」

「でも、あくまゆうたら、ろくでもない噂が多いで」

「そうですか？ 総帥のサタン以下、全あくま七千四百万五千九百二十名、一丸となってがんばっておるんですけどね」

「サタン、て、空飛べるんか」

「もちろん、あくまですから」

「夜に飛ぶんやな」

「そうですね。あくまですから」

「動物とかを使うか」

「使い魔としてですか？ そりゃ、

あくまですからね」

「トナカイとかやろ」

「え……？」

「クリスマスになったら赤い服着て出てくるやろ、サタンて」

「それはサンタです。えらいまちがいですわ」

「あくまは黒ミサを行って、赤ん坊を生け贄にして血をみんなで飲んだりするんやろ」

「誤解です。それは、アントン・ラヴェイの悪い影響です。黒ミサというのは、そんな怖いものじゃないんです。他にも地方によって赤ミサ、白ミサなどがありまして……」

「はあ？」

「名古屋のほうは八丁ミサとか……」

「それは、ミソやろ。……こないだトンデモ系の本を読んだら、世界はすでにあくまの手に落ちている！ とか書いてあったで」

「まさか。我々はな一んにもしてませんよ」

RAKUGO THE FUTURE

JAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 26 回:新・悪魔事典

「マッキントッシュもあくまの世界征服計画に荷担してるとか書いてあったで。ほら、あの……アクマいう機械がヒットしてるやろ」
「アクマいう機械……？ さあ……」
「ほら、半透明のパソコンで……」
「もしかしたらそれ、アイマックとちがいますか。アクマ……アイマク……かなり無理がありますよ」
「やかましいわい。おもしろかったらええんじゃ」
「おもしろいですかね……」
「おもしろいかな」
「はい」
「あくまの数字とかいわれてる666ゆうのはどういう意味やねん」
「あ、あれですか。黙示録に載ってるやつ。あれはしょうもないですよ。聞いたら驚きますよ。ろくろくろく、を反対から読むと、ろくろくろく、になるでしょ。黒が三つで、黒三さ……」
「え、なんて？」

「黒が三つで黒三さ……」
「え、なんて？」
「なんべんも言わしなさんな。黒が三つで……」
「もうええわ。ほんまにしょうもないな」
「だから、本当はあくまなんて他愛のないもんなんです。契約してください、お願いします」
「ほんまに五百八十円なんやろな」
「はいはい、まちがいありません」
「なんか、こめかみに汗が滲んでるで。おまえ、わしをだまそうとしてるんっちゃうか。やましいとこ、あるんっちゃうか」
「そ、そ、そんなこと……やま～しいあ～くま～」
「うーん……ほな、かわいそうやさかいに契約したるわ」
「あ、ありがとうございます！
じゃあ、こことここに判子を……これで契約成立いたしました。これがあくま事典全七千四百万五千九百二十巻で

す。どうぞ三つの願いをおっしゃってください」
「そやな……急に言われてもなあ……まず、金やな。何が何というても金や。百億円ほど金が欲しい」
「はいはいそれから」
「次は地位やな。この国の総理大臣にしてほしい」
「はいはいそれから」
「最後は女や。美人を百人ほどまわりにはべらせてほしい」
「わかりました。それで終わりですね。じゃあ」
「おいこらちょっと待て。三つの願いかなえてくれよ」
「え？ 私は三つの願いをきくとはいいましたけど、かなえるとは言ってませんよ」
「こ、こ、こ、こ、このガキ！」
「それでは、契約どおり魂をいただきます」
「なんやと！」

「ほら、この第218条を見てください。あくま事典販売の代価として、甲は乙に代金五百八十円並びに魂を支払うものとする。ちゃあんと書いてあるでしょ」
「そんな先のほうまで読めるかい！だましよったな。よっしゃ、クーリングオフしたる」
「残念でした。地獄にはクーリングオフの制度はありません。では魂を……」
「そうはいくかい。おまえ、わしを知らんとはモグリやな」
「何のことです。今頃、そんな負け惜しみを言っても遅いですよ」
「知らんのか。わしは『あくまばらい師』や」
「う、嘘ですよ。ちゃんと調べてから来てるんだから……」
「嘘でない証拠を見せたる。ほら、この鞆を見てみ。あくまばらい師と書いてあるやろ」
「そ、そ、そうだったのか」

TANAKA HIROFUMI
P R E S E N T S

RAKUGO THE FUTURE

JAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 26 回:新・悪魔事典

「おまえなんぞ、わしの力であつという
まに払ってやるぞ。地獄の塵になりたあ
ないんやったら、とっとと退散せえ！」
「くそっ、くやしipp。初仕事の相手が
よりによってあくまばらい師だったと
は……」

「ああ、よかった。帰りよった。もう
ちょっとでだまされて魂とられるとこ
やったわ」

「先生。阿熊原先生じゃないですか。こ
んなところで何をなさってるんですか」
「いや、ちょっとうたたねを……そちら
はどなたですか」

「ああ。このかたは当病院を見学に来
られた○○病院の田中さんです。田中
さん、こちらが阿熊原医師です。

田中さん……どうなさいました？」

「うーん、これがオチなのか……」